

# お接待 — 四国遍路でもっとも大切な文化資源 —



総本山善通寺法主  
菅 智潤

## 1. 四国遍路の起源

四国のミチを歩いていた人々の姿が現れる最初の資料として、平安末期に編纂された『梁塵秘抄』に、「われらが修行せし様は忍辱袈裟をば肩に掛け、また笈を負い衣はいつとなくしほたれて四国の辺路をぞ常に踏む」（しほたれという言葉が示すように海辺を通っているので、その衣が打ち寄せる潮のために、潮が垂れるほど濡れてくしゃくしゃになっている）とあって、「四国の辺地」を巡って行く修行が、現在の四国遍路の起源と考えられている。

四国は本来、遍路信仰の場であって、弘法大師信仰に基づくものではなかった。

辺路信仰が弘法大師と結びつくのは、鎌倉時代になってからである。平安中期に起こった弘法大師は高野山奥の院で瞑想に入ったまま今も生きているとする入定伝説が、密教の遊行者である高野聖達によって四国に伝えられたと同時に、彼らが弘法大師の遺徳を偲んで四国を巡ったことにより、辺路信仰と弘法大師が結びついていったと考えられている。

江戸時代にはほぼ現在と同じ形式になり、一般の人々に広まった四国遍路はその後、交通手段の発達などによってどんどん便利になり、普及していった。現代でも人々の弘法大師に対する篤い信仰は、時空を越えて脈々と受け継がれ、今日も多くの「お遍路さん」が、大師に会いに四国を訪れているのである。

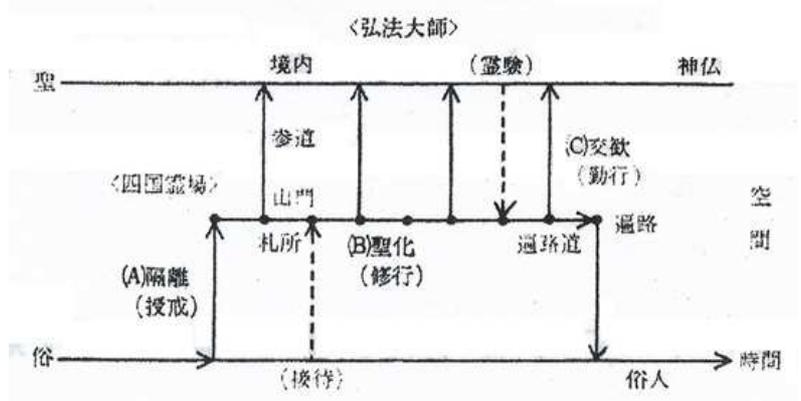
## 2. 四国遍路の宗教的世界観

(参照 図1)

## 3. 四国遍路の「お接待」

お接待とは、巡礼者則ち遍路(以下、巡礼者のことを遍路と呼ぶ)は弘法大師と共にあるとする「同行二人」の思想から、遍路への接待は弘法大師への接待であると解釈され、四国独特の文化「お接待」として伝承されてきた。

図1 四国遍路における儀礼の構造



人々はなぜ接待を行うのか。接待することで功德を授かることができるなどの宗教的動機に加え、遍路に喜んで欲しいというのも重要な要因である。そのため、接待者は想像力をはたらかせ多彩な接待を生み出す。接待で提供されるものもさまざまである。金銭や飲食物に加えて、杖、草鞋、手ぬぐいなど実用品のほか、土産物や御守り、可愛い小物、按摩、散髪、鍼灸などの施しもあった。

歩く遍路を車に乗せる接待もあり、善根宿(ぜんこんやど=諸国行脚の修行者・遍路、困っている旅行者を無料で泊める宿)なども接待の一種と考えることができる。遍路は接待を拒んではならず、般若心経と大帥宝号を唱えて、納札(おさめふだ=住所氏名や参拝年月日などを書き寺院に納めるお札)を1枚相手に手渡す。この納札を集めて玉にして、玄関に吊しておく、厄難除けになるという。



接待が行われる時間や場所も多様である。特定の場所に設ける「接待所」も常設のもの、季節、曜日を限定するもの、また無人のもの、有人のものともさまざまである。たまたまその場に出会った故に発動する接待もある。遍路に不慣れであったり、無事に歩き通せるのかつい心配になったり応援しなくなったりする存在、若者や女性、子供などは、とりわけ接待心がかき立てられるようであり、ほぼ同じ道を通っても、人によって接待を受けたり、受けなかったりということもありうる。

接待は遍路と地域社会をつなぐ回路であり、様々な遍路を受け入れる装置であった。ここから差別や忌避、あるいは同情、慈愛、時には畏敬や尊敬など、様々な混濁した感情が育まれた。その意味で人間くさい《もてなし》の文化が、すなわち「お接待」なのである。

今日、接待に頼って生きる遍路はほぼ皆無であろう。だが、接待は現在もなお変わらず遍路と地域社会をつなぐ回路である。そこではモノに込められたココロこそが、モノ自体より大きな意味を持ち、時に感動を呼ぶ。遍路と接待者の邂逅は一度きりかもしれないが、他方、接待は場所を変え、人を変え、時に接待の在り方も変えて繰り返され、多くの人々をつなぎとめる。その連鎖の先にあるものこそが接待の未来の姿なのではないだろうか。

現代社会の特徴の一つは、個々人の関心や嗜好が細分化する多様化だ。多様化は社会全体を寛容にする良い傾向でもあります。一方で他者とのコミュニケーションを難しくする。誰が何を考えて生きているのか分からないのが多様な社会だ。お接待は、多様化した社会の中で、深いコミュニケーションを生み出す可能性を持っているのである。

(令和元年7月4日サンポート高松国際会議場、第55回全肥商連全国研修会にて)